

上越教育大学教職大学院・平成 24 年度新潟講座(12.6.16.)
豊かな人間性と社会性を育てる生活科教育
～生活科の教科特性とその存在意義～

木村吉彦

I 生活科の教科特性

☆生活科の教科特性その 1：子どもの（発達）実態に即す教科

（＝子どもを豊かに理解できる教科）

◎従来教科：学問的背景あり（例）理科≡物・化・生・地、国語≡国文学・国語学）

人類の知的遺産を、子どもの年齢段階に応じて配列したもの＝（従来）教科

教師の仕事：（知識・技能の）伝達、子どもの課題：（知識・技能の）習得・復元

子ども理解＝各教科に見合った資質能力への理解（部分的理解であっても学習活動は可能←中学校の教科担任制）

◎生活科：学問的背景なし

子どもの事実・実態から学習が始まる。

（何に興味関心があるのか、どんな活動をしたがっているのか）

⇒「はじめに子ども理解あり」≡教科書は子どもである

子どもを全人的に理解する必要あり

⇒子どものトータルな育ちを「学力」と捉える。（全人的学力観）

決まった答えのない教科（例：間引きく大根を育てた児童の写真）

⇒子どもを**長期的展望と幅広い視野で（＝豊かに：長い目・広い目で）理解する必要**

☆生活科の教科特性その 2：自分自身を学習対象とする教科（＝主体性を育てる教科）

◎「自分自身」を学習対象とする生活科＜従来教科では考えられない、道徳のみ＞

生活科の場合…

「自分自身への気付き」を最も大切にする（自己認識＝生活科の原点）

＝「わかるようになったぼく・わたし」「できるようになったぼく・わたし」

に気付く（意識・自覚する）⇒自己肯定感⇒生きる自信≡自立への基礎

⇒主体的に「生きる力」

自立＝社会人としてのひとりだち（人とのかかわりを大事にして、他者への上手な依存の上に立って自分を発揮して生きること）

例）1 年生の太郎君は 4 月の入学当初は、人前に出るとあがってしまって何もしやべれなかったのに、1 学期も終わりに近い 7 月には、クラスの仲間に堂々と自分の捕まえた虫について自慢できるようになった。「人前で自分の考えを述べることができる（自己表明できる）＝自立の一要素」ようになった太郎君をほめてあげて（自分の成長に気付かせて）、生きる自信を持たせる。

→生きる自信⇒「生きる力」を育てるための最重要教科としての生活科

☆生活科の教科特性その 3：体験を通して学ぶ教科：気付きとコミュニケーション重視（体験によって主体性・社会性が同時に育つことのできる教科）

～主観知と客観知、経験知（生活知）と科学知 の往復～

①自分とのかかわりで自然・社会・自分自身について学ぶ

主観知（個人の思い）の尊重→客観的な認識（客観知）の基礎

＜従来教科学力との関連＞

具体例) おいしいキュウリが食べたい(「食べてもいいよ」とキュウリが語った)
⇒キュウリの適切な収穫時期は?(cm,g 単位学習)
＝気付きの質を高める・科学的な見方・考え方の基礎を養うきっかけとなる。

◎生活科は気付いて(気付かせて)終わりではない。

「**気付きの質を高める**」の意味するもの: 気付き⇄対象への～+自分自身への～

a. 対象への気付き: 主観知から客観知へ

b. 自分自身への気付き: その都度の自分の思いへの自覚から自分の成長への自覚
主観性を大切にしつつ、自分をより冷静に見つめ、かつ成長に気付くことで
全人的な意味での児童の豊かさ(豊かな人間性)を構築することができる。

②グループ活動中心の体験が社会性をはぐくむ～活動のプロセスを重視する協働学習
協働学習: 課題解決や目標に向かってグループで活動する際に、結果や作品の単なる
共有にとどまらず、その過程を交流・探究することによって互恵的に学び合う学習活動。
生活科において、グループによる体験活動を仕組むことで協調性をはぐくめるが、
それに「**協働学習**」を取り入れることで、子ども同士の思考力を高めたり、コミュニケー
ーション能力を高める体験学習にすることで、より豊かな社会性をはぐくむ。

Ⅱ 生活科の存在意義

1. 自己決定・自己選択の機会の提供: 思考力と主体性を備えた児童の育成

「活動の大枠(飼育か栽培か)は教師が決めるが、具体的な学習内容は子ども自身
に任せ、自分で決めることができる」という学習形態。

2. 子どもにとって「**学ぶ必然性のある学習(機会)**」の提供: 「なぜ勉強するの?」回答

・作文に書きたいから文字を覚える。

・正確に丈や重さを測りたいから単位(cm,g)を教えてもらう。

→他者から強制されたり、一方的に教えられたりして学習するのではない。

自分で見付けた課題を自分の力で解決するために、自ら考え、自ら学ぶ力を養う。

⇒探究的な学習

3. よりよき生活者の育成: 自分の日常を見つめ、その中で見いだした課題を自分自
身の力で解決しようとする豊かな人間づくり

飼育・栽培活動に象徴されるように、毎日の課題(えさやり・水やり)に積極的に
取り組むことで、日々の日常的課題に対し必然性をもって取り組める児童が育つ。

4. 社会性の育成: 自分を発揮しつつ他者(相手)とかかわる力が同時に育つ

探検単元・遊び単元・飼育・栽培単元などにグループ活動を取り入れることで、協
調性・伝達力・自己表現力・思考力・コミュニケーション力など、社会人として必
要な人間性(＝豊かな社会性)をはぐくむことができる。

5. 「生きる力」育成の切り札: 活動や体験を通して全人的に子どもを豊かに育てる。

主体性と社会性の両面を同時並行に育てることで、「生きる力」育成に直結し、豊か
な人間性を全人的に育て上げることができる教科が生活科である。

◎参考文献

木村吉彦『生活科の理論と実践―「生きる力」をはぐくむ教育のあり方―』(日本文教出版,2012)

木村吉彦『生活科の新生を求めて～幼小連携から総合的な学習まで～』(日本文教出版,2003)

木村吉彦編著『小学校 新学習指導要領の展開 生活科編』(明治図書,2008)

◎木村のHP: 「よっちゃんの部屋へようこそ!」